

同志社大学

2009年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2010年 3月17日提出

所属	職名	氏名
文学部	教授	岸文和
研究題目	日本近世における視覚文化の美的構造—美的性質の類型論を手がかりに—	
研究成果の概要	<p>本研究は、日本近世における美的世界の全体構造を、古代・中世・近代のそれと比較的に把握するために、次の2つのことを行うことを課題とする。すなわち、第1に、近世の文学・随筆・画史・画論のテクストにおいて、視覚文化について語るために使用される美的用語 (aesthetic term)、すなわち、現象的／第三性質的／価値関与的であることを要件とする美的性質 (aesthetic quality) を表示する語彙の用例を博捜し、共時的な視点から、それらがどの種の視覚対象に対して適用され、どのような美的＝感性的な性質を意味しているのかを分析的に記述するとともに、通時的な変化を観察することによって、それらの語彙が表示している美的性質の内実を解明すること。第2に、そのようにして確定された個別的な美的性質の内実を、ヘルメレン (G. Hermeren) の「美的性質の類型論——ゲシュタルト的 (gestalt) / 趣味的 (taste) / 自然的 (nature) / 行動的 (behavior) / 表出的 (expressive) / 反応的 (reaction) 性質——に基づいて整理し、それら個別的な美的性質が相互に取り結んでいる関係・布置を明らかにすることである。</p> <p>平成21年度は、岩波書店の「日本古典文学大系」をデジタル化した国文学研究資料館の「日本古典文学本文データベース」の近世の部 (505作品) を利用して、日本近世の視覚文化について語る美的用語の収集を試みるとともに、次の2編の著書 (分担) を執筆した。すなわち、第1に、「北斎画〈富嶽三十六景〉の制作順序——空間構成を手がかりに」 (近畿大学日本文化研究所編『日本文化の中心と周縁』、43-61頁、風媒社、2010年3月) は、直接的には、北斎画「富嶽三十六景」全46点の制作順序を特定することを目的とするものであった。しかし、間接的に、「深さ」という美的性質の一種 (ヘルメレンの類型論で言う「自然的性質」) が、「浮絵」以来の日本の「名所絵」によってどのように志向／表現され、当時の人たちによってどのように知覚／受容されていたかを明らかにするものであった。第2に、「メディアとしての芸術＝環境」 (松井利夫・上村博編『芸術環境を育てるために』、261-304頁、角川学芸出版、2010年3月) は、直接的には、言語的／視覚的コミュニケーション (言語／視覚文化) のメディア的性格を、ソシュール (F. de Saussure)、バルト (R. Barthes) の「記号学」、およびヤコブソン (R. Jakobson) の「言語学」の観点から整理するものであった。しかし、間接的には、言語的／視覚的コミュニケーションにおける「美的性質」の位置／位相を理論的に測定することによって、本研究の理論的基盤を確認するものであった。</p>	